

京鹿子

鹿子とは、鹿の角の模様を指す。京鹿子は、鹿の角の模様を模した文様を指す。京鹿子は、鹿の角の模様を模した文様を指す。京鹿子は、鹿の角の模様を模した文様を指す。

7月号

聖五月
丸山佳子



鯉のぼり男が赤の似合ふ世に
あらためて聞けぬ現実鴨北へ
少しづつ不良になつてゆく地虫
こんな日に欠伸三つも八十八夜



人 も 木 も 鳥 も 保 菌 者 聖 五 月
生 者 に は あ ま た 器 に 祭 くる
雑 草 で い い と 寸 寸 花 三 味 線
ホ ー ム レ ス の 仔 細 見 に ゆ く 一 蝶 が
沈 黙 は 返 事 の 一 つ 朝 曇
こ の 辺 で 自 力 本 願 蛇 皮 を

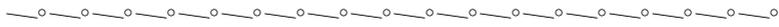


豊田 都 峰

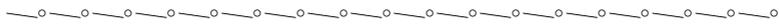
清響集 その六十三

晩春の嵯峨野めぐりも句碑ゆかり
石畳たしかかな若葉の音となる
春なごり水紋二重にまた三重に
ひとむらの青葉とりでのかくれ里
いちまいの青葉かざしてひと日の贅
生身仏青葉の天にたちたまふ





馬酔木鳴る薬師如来のあさぼらけ
草若葉門址堂址と歩をひろふ
庭湖石惜春の日を寄せたたむ
竹の秋人追ふなりに舞ふひぐれ
竹秋や夕日はいつもななめなり
葵懸け御祖にとほくつながりて
祭馬門出の二三歩速がけに
遅日なる砂流紋を追ひもして



*

若葉して溪へはすべり易きなる
庵また高く配して花菖蒲
囀や鯉と共有してる午後
凝らすとは還ることなり松の芯
回遊は春の鴨にも許さるる
ひなげしやあますことなく日のわたる
ひなげしに憑かるは野風だけでなし

秀華採集

白地図やまづ蝶の径付けてやる

井上 菜摘子

この発想は瑞々しく、感覚的である。白地図にはいろいろな書き込みが出来るが、初蝶への思い入れとは恐れ入る。

地下足袋が好きで息災日脚伸ぶ

坂根 北陵

着ぶくれて一善一悪せざりし日

西村 葉子

一番しつかりした足元、まるで自分の足そのもののような感覚での日々の労働。これで息災でなければ天を恨むよりない。「日脚伸ぶ」がたいへん働いている。後句もまた、ひとときの姿としてよいと思う。小人閑居して不善をなす、ではないので。

鈴鹿 仁

句碑巡り

句碑古りて絮たんぽぽの自在なり

風青し二尊に流す鐘三打

青夜の詩

明易し鴉に貫くものを問ふ

花苔に落暉の塔の影を以て

諾なふもここより聖地蟻の列

再会の握手の中の青夜の詩

若夏の眞砂つぶやく濱の精

近 詠

宇都宮滴水

牛ぎ車っしや

光陰のどこかが緩む牛車音

紋ひとつ汚し義理欠く黒揚羽

夏ひばり雲いちまいの高さ越ゆ

根元より日暮来てゐる墓

夏おちば白州の縁をなほ余す

望雲の池ともなれり花浮萍

考へる人にいちべつ青噴水

神麓集



国宝の仁王見下す 遍路笠
遍路寺 左廻りと右廻り
豪快に炷く大香炉 春さむし
マントラの謎のおぼろに札所寺
真言の教へをしかと 遍路寺

角 直指

漁十日 鮎子網を淡く干す
巻爪や花冷えの下駄履くもがな
一湾を裁ち航く汽艇花の雲
十円の処負ひもどる花便り
遠縁の土佐つ子よりの初鯉

禰寝 瓶史

溶けさうな眼で見られぬる子猫かな
春時雨紺の蛇の目の行方知れず
佇めば見えて来るもの春の土堤
青柳の縄手を犬と突つ走る
エルサレム未だ混沌復活祭

丹生をだまき

湯迫温泉 山田をがたま
姿佳き五葉松古り昏おそし
露天湯は空あるばかり夕おぼろ
千年の榎の根撫でてのどけしや
名城も花未だしと敬遠す
花に早く團子一箱旅終へる

疏水に散る花も「蹴上」のしがらみに
志賀・山科花の水嘯む京わらべ
朱雀門春のリズムを鐸奏づ
庭池の金魚小さきは鳥の餌に
山躑躅と言へど芽立のさ緑に

奥村 鷹尾

ほこほこと土こぼれけり花曇
むらさきに山はけむりて余花の雨
言ひ忘れ置き忘れして亀の鳴く
鏡閉づ 春愁をなほ封ぜざり
菜種梅雨くちずさみぬる歌の数

船越 美喜

神麓集



岩崎 憲二
円山へ京を引き寄す夕櫻
京も北花があるのに雪を見る
夕櫻見上ぐる人に邪心なし
蕨餅峠を越へし口癒す
「よいいやさ」都踊りはとき飾る

荻野 千枝
比叡^{あわ}淡く現^あれて春雷遠くせり
春の水散るもの待ちてのたりかな
梅咲いて下り坂ほど匂ひけり
春の風邪熱眞水にまさる味しらず
生命線をころがつてくる春手水

葉 桜 柴田 朱美
花は葉に幹の鬱血はじまれり
葉桜や渾身で漕ぐ車椅子
不意にくるめまいの怖さは葉に
少年に火縄の匂ひ花は葉に
水掻きの生える兆しや花は葉に

高木 智
満開の花のそびらを陽が沈む
渋滞の街道並木夕桜
花仰ぐ肩より浮気心去る
雛罌粟の一粒種を咲かせをり
聖五月少年の声響きけり

服部 郁史
病む母に粥白々と芽木の雨
母にある隠し抽出花かぶら
まんさくや寝ごとのやうな午後の風
涅槃図に母の坐れる場所さがす
野火遠し奇襲に耐へしその家紋

松本 鷹根
雪やなぎ雨に従ふ丈尽し
落椿含み笑ひのまま掃かる
水仙に近寄り影を淡くする
春禽の梢わたりや読書欲
地下を来し息芽木空へ吐き尽す



京鹿子集

豊田都峰選

亀岡 井上菜摘子

白地図やまづ蝶の径付けてやる
晩年へ雛ぼんぼりを点しけり
半身は混沌にゐる芽の菖蒲
横道がちらちらとあり茎立ちぬ
春の雪文束ねればオルゴール
地下足袋が好きで息災日脚伸び
底抜けに笑ひ春愁置いてくる
望郷の声あげて鳥雲に入る
鳶翾るからす吹かれて春一番
箴言を音読しては彼岸寺
着ぶくれて一善一悪せざりし日

東京 西村 葉子

津山 坂根 北陵

水仙のねじれ葉一枚拗ねてゐる
折れ癖の兎の耳に冴返る
日脚伸びずつとんきように鶏鳴いて
古雛やひそひそ雨夜の品定め
病窓にネオン華やか春寒し
春告げる雨音つよし病み臥しぬ
病窓五センチ開けて木の芽の風通す
病窓に三月の雲育ちたる
聖書のごと春の句集を枕辺に
天上の宴終るかさくら霏々
人同じからずと言へば亀鳴けり

戸田 中村江利子

千葉 河内 桜人